アメリカにおける高齢者の居住問題

――長期介護退職者コミュニティ（CCRC）を中心として――

伊　東　眞理子

Ⅰ．はじめに

私は，1995年の８月中旬から11月の末迄の約４カ月にわたり，高齢者社会政策の研究の為にアメリカに留学してきた。

西海岸では，UCLA（カリフォルニア大学ロスアンジェルス校）を中心としてUSC（南カリフォルニア大学）で講義を聴いたり，研究者たちとディスカッションをしたりした。東海岸では，主としてニューヨークのフォーダム大学を拠点に，時としてコロンビア大学を訪ねたり，ボストンに足を伸ばしてハーバード大学・日米研究センターにお世話になったりした。

以上のようにアメリカの東西両方面において，私の専門領域である高齢者の居住問題に焦点を当てながら，理論的及び経験的研究を重ねて来たが，また，それらに関連して，機会があるごとに，多くの社会問題のセッションに参加し，年齢差別，女性差別，人種差別等々についての差別徹廃問題をも学んで来た。ついでながら，在学中に生じたＯ・Ｊ・シンプソン事件についても，直接に見聞したりして，教えられることが多かった。

なお，女性問題についても，国連大学の女性協会会長を務める中西珠子氏等とも知遇を得て，研究の刺激を受けることが多かった。このような刺激を受け，本学のいのちの教育センターの「女性といのち」シリーズを担当する者として，相当の収獲があった。

そして，何よりも強調したい点は，日本では，高齢者福祉については，

すぐにイギリスやスウェーデン，デンマーク等の北欧が引き合いに出され，それらの国がモデルのように言われているが，アメリカにおいても，壮大なスケールで高齢者問題の対策と研究が行なわれていることである。私も行って見て，それが想像以上であった事に驚くと共に，ここに研究に来て誠に良かったと思った訳である。

大学においても高齢問題の研究，即ち，老年学が種々なる学問分野にわたって展開され研究されていた。具体的には，例えばUCLAの老年学センターでは，老年心理学，老年社会学，老年者教育学，高齢者介護学，高齢者公衆衛生学，高齢者建築学，さらに高齢者に関する公共政策・経済学・レクリエーション対策・栄養学・法律学・哲学・芸術学等々といった20を超す専門分野の講座が設けられていた。そして，その分野に属する研究者たちがチームを組んで，正に学際的に研究を続けていた。これは世界各国の水準を抜くものであろうと思われた。その中でも私が最も関心をそそられたのは，やはり高齢者の居住形態の中の長期介護退職者コミュニティ（Continuing Care Retirement Community：以下CCRCと略す）であった。実のところ私は，ロスアンジェルスに居るときに，志願してウエストウッド・ホライゾン（Westwood Horizons）というCCRCに約1カ月体験入所し，大学にもそこから通ったのである。一部の人たちとはいえ，ここでのアメリカの高齢者とのなまの生活体験は，私にとって極めて重要であり，ここで得た知識は，今後どれほど高齢者福祉を研究する者として役立つかは計り知れない。

ところで，不思議なことに，このようなCCRCが日本には，殆ど紹介されていない。そこで，本稿においては，長期介護退職者コミュニティについて広く紹介し，また，私としての分析を加えたいと思う。

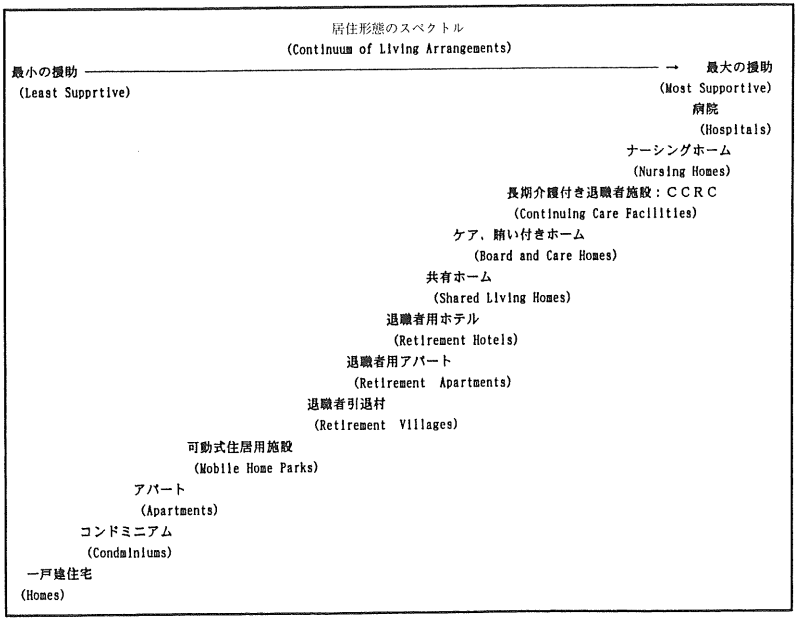
Ⅱ．CCRCの定義——CCRCとは何か——

これまで，私は高齢者の居住形態を在宅型と施設型に分けてきた。とこ

ろが，アメリカの文献をみてみると，これとは別に，第二の分け方として年齢混住型（Age–Integrated）と年齢分住型（Age–Segregated）とに分類する方法がある。前者は，高齢者が年齢の異なる人々と共に住むものであり，例えば，家族と共に住むのがこれである。後者は高齢者同志が同じ場所に住むものである。年齢混住型の方が，異なる世代と話すことができて良いか，年齢分住型の方が同質の仲間と住むことができて心も通じやすくて良いかは，今後の研究課題であり，極めてポレミカリィな問題といえる。さらに第三の分類法として，援助の大小によるものがある。すなわち最大の援助（Most Supportive）型と最小の援助（Least Supportive）型の両極の内にさまざまなサポートの程度による居住形態を，スペクトル的に配列する分類法である。

その援助の程度による分け方については，表１に示すように，最も少な

表１



出所：Streib, Folts, And Hilker, 1991 (1) p. 18

い援助の一戸建住宅と，最大の援助のナーシングホームがあり，その間に様々なる形態が散らばっているのである。このような中からアメリカでは，いろいろな選択が出来るのであって，そういった種々なる局面を総括してAlternative Living Arrangementという言葉で表現している訳である。

この中で注目に値するのは，長期介護付き退職者コミュニティすなわちCCRCであって，第1の分類法によれば施設型であり，第2の分類法に従えば，年齢分住型の典型的なものである。第3の分類法によれば，最大の援助寄りではあるが，極端なものではない。

CCRCとは，引退年齢の人々に居住，医療を含むサービスを提供する組織を持った集合住宅である。時には一戸建の集合した村の様な形をしたものもあるが，多くは，一つのビルディングの中に納まっているのである。そこは，多くの個室と共用部分から成っており，共用部分は，ロビー，ホール，会議室，食堂，美容室，パティオ等である。CCRCの職員としては，マネージャー，副マネージャー，受付，掃除婦，コック，ウェイター等である。この他に，週に一度外部から医師が来る。個室には概ねデラックスな2LDK，3LDKタイプが多い。いわば，高齢者専用のマンションである。最低条件としては，個人の生活ユニットが整えられていることである。パーソナルケア，中間介護施設（Intermediate and Skilled Nursing Care）等の医療施設が併設されている場合もある。住居と様々な医療サービスを1年以上保証する契約を交わすことになっている。医療費は前払いがなされているため，他の施設の医療サービスを受けるより安くなる。

このCCRCにもいくつかのパターン[2)]があるが，大部分は，ホテルの様な一つのビルディングを高齢者専用のコミュニティとしたものである。

今日ではCCRCは企業として営まれているから，費用はすべて入居者の負担で賄われている。これは，我が国の有料老人ホームとかなり類似している。従って，その費用はかなり高く，入居一時金は不要だが，月々$3,000から$5,000くらいのものを支払わなければならない。そのため，比較的裕福な階層が入居者の大部分を占める。このことと関係して，この

施設に入って来る者は，1980年代中ばの統計で高齢人口の２％程度，現在の1990年代中ばにおいても５％程度と数値としては非常に少ないといえる。しかしながら，age–segregated タイプの居住としては，典型的なものであるので，高齢者居住の問題を考えるに当たっては，非常に良い実験例と考えられるのである。

１．CCRC の歴史――「ゲットーからパラダイスへ」

ところで，アメリカ国勢調査局の統計によれば，1984年の高齢化率（全人口に対する65歳以上高齢者の割合）は11.3％であった。それが2000年には12.8％，2025年には19.6％，2050年には，超高齢者社会といわれる21％に達すると予測されている。それを見通して，アメリカにおいてはかなり早くより高齢者施設についての考慮がおこなわれていた。言うまでもなく，アメリカでは日本より個人主義が進んでいて，日本のように家族に依存するということが少なかったので，かなり早くから高齢者の施設が考えられていて，その中でも age–segregated タイプの施設，つまり退職高齢者の専用居住がいち早く準備されたのである。

その始まりは，概要を述べるならば，1920年頃まで遡ることができる。20年代には年金制度もなかったし，公的制度に頼るということも，あまり当てにしない国柄（国民性）でもあったので，民間でそのようなものが考えられた。

西欧では中世にギルドが発達しており，職人を中心に，死亡，障害，老化からくるいろいろな損失に備えて，前もって金を積み立てる試みがあった。そのような相互扶助の底流を基礎としつつ，20世紀の初めには一般市民の間にも相互扶助の活動が芽生えてきた。西欧の伝統を受継いだアメリカでも，病院や孤児院と共に，粗末な老人ホームもつくられるようになってきた。その上に，アメリカのことであるから，ピューリタリズムを始めとし，宗教が影響を及ぼして教会が上のような相互扶助活動の拠点となることが多かった。

Huntによれば，アメリカの退職者コミュニティの歴史は，様々な，労働者や，職人たちが，宗教団体を中心として，引退した市民たちのために生活の場をつくろうと，フロリダに安価な土地を求めだした1920年に由来する。1929年度の労働統計局の報告によると，高齢者用のホームの80％は宗教または民間団体によって運営されていた。年金などは当時なかったので，教会は宣教師らの住居と面倒を見る責任があると感じたのであり，それが一般市民に拡大されてきたわけである。1934年以前は，長期介護を提供するコミュニティとしては，オレゴンのメソジスト教会，プレビステリアン，ユナイティド　チャーチ　オブ　キリスト，そして民間の財団などであった。後程このような運動が，かの社会保障（Social Security）を生み出す一要因として働いたのである。

ところが，第二次世界大戦後，フロリダと他州の民間建築業が，増大しつつある老人人口を対象にした住宅の市場性に気づいた。1950年には，カリフォルニアの教会の多くが，太平洋岸に住む裕福な高齢者向けに，従来のあまり良くも魅力的でもない，いわゆる“ホーム”に代わるものを探し始めた。引退後も収入が十分にある高齢者が増えてそういった施設への需要も生まれてきた。政府もそれを野放しにしておく訳にもいかず，全国住宅条令（National Housing Act）を作って第231節で高齢者用の賃貸住宅開発のために連邦抵当保険を設けた。

第二次世界大戦後そういう状況下にあって，CCRCも単に食事を提供するのみならず，次第に医療も提供し，さらには，余暇対策やレクリエーション対策も加えるようになってきた。しかも，開発業者の市場競争がCCRCの質を向上させるのに貢献したようである。

そのように発展した結果，1970年頃までには，一般的に退職者コミュニティは「安い」「粗末」という長年の悪いイメージを大きく修正していた。確かにステレオタイプであるトレーラー公園（Trailer parks）的イメージはまだ残っていたが，次第に裕福な高齢者の集合的コンセプトへと変わっていきつつあった。このようにCCRCも発展してきて政府も益々黙視出

来なくなった。既に，上述のような住宅条令もあったが，更に，CCRCの運営基準をコントロールするようになって土地区画等の物理的制限や免許委員会によるケアの質の規制が行われるようになった。こうして，この世界にも若干の規制が加えられるようになって来たのである。

尚，CCRCに近接するものに終身介護コミュニティ（(Life–Care Communitv）があるが，これは入居者を生涯にわたってケアするという法律的保障があるコミュニティに限定される。もっとも，この約束がきっちり守られるかどうかは問題で，1977年にカリフォルニア，アリゾナ，フロリダ，ハワイ，ミシガンにある約10の終身介護コミュニティが倒産したことにより弱点が露呈した。当時の規制は極めて欠陥の多いものであったことが，この点からも判るのである。その後この規制の仕方は，いくらか改善され，コミュニティ建設の場所や時期に制限が加わり，投資者の最低限の経済的責任についても言及されるようになった。

以上を要約するならば，CCRCの嚆矢は，市民の相互扶助と教会の社会事業によって，必ずしも豊かでない，どちらかと言えば身寄りのない老人を集めて世話をした施設にある。そして，その後アメリカ経済は第一次世界大戦を経て急速に発展し，また，他方において高齢化率も高まった。その結果として，経済力のある老人が増加し，よりカンフォタブルな老人ホームを求めるようになった。そこに着目した企業家が，そのようなニーズに対応する為の施設として，営利目的から準備し始めた。このように需給双方の事業からCCRCがアメリカにおいて発展した。ことに第二次世界大戦後，軍需産業中心から民間産業にアメリカ経済が変革を遂げ，高度成長期を経て後，良く整備されたCCRCが設立される状況になったのである。また，これらは，寒さに弱い高齢者のことであるから当然ながらカリフォルニアとかフロリダのような温暖なサンベルトに集中したのであった。こうして，「ゲットーからパラダイスへ」の発展の傾向を辿り始めたわけである。

2．CCRC 入居者の特色

最低年齢，資産，重い病気がないこと，メディケアまたは民間保険を持っていること，などの厳しい入居時点での条件があるので，CCRC の入居者は一般の高齢者と比べて健康で裕福という傾向がある。また，CCRC の入居者を分析したブルテナとウッドは，ここの入居者が社会的地位や人種的，民族的背景において似通っていることを見付け出した。

更に対人関係についてみるならば，シャーマンエトアールは，５分の１から半分の住民には子供がおらず，子供がいる人の31％は週に一度子供と会い，平均は月一回以下だが，少なくとも毎年一回は会っていたと報告している。37％は好きなだけ子供と会っていると答え，88％は子供との関係には満足していると答えている。次に家族以外の対人関係では，38％は40歳以下の友人がおり，３分の２は若い人と好きなだけ会っている。60％は「若い人といたほうが楽しい」とは考えておらず，たとえ若者が周りにいたとしても，自分たちは自分たちの興味のあることで忙しいという。いろいろな年代の人たちと一緒に住む方を望むかという質問には意見が分かれた。60～90％はここ１年間で新しい友人が出来たと言い，全員がおしゃべり出来る人間が少なくとも一人はいると報告している。このように，総じて対人的な面では，生活満足度は高いと報告されている。

バルテナとウッドは CCRC の入居者に対してまたもう一つの調査を行なった。４箇所の入居者に面接の結果，退職者コミュニティへの生活の順応には，性格や家族状況が重要であることが分かった。この調査で入居者は一般の高齢者人口よりも社会経済レベルの高い人々であった。大学に１年又は２年行ったことのある人口の比率は一般で10％であるのに対し，この調査対象では43％であった。専門的な職業や，ビジネスに従事したことのある人口は一般で23％であるのに対して，ここでは32％であった。そして43％の引退前の年収は，当時としてはかなり高かったようである。子供たちはもともと全国に散らばって住んでいるので，ここの住人にとって特に子供との繋がりが急に失われた訳ではなかった。ふつうの高齢者達より

も余暇を楽しむことに重きをおいていた。ほとんどの住人が生産的役割を退いたことに満足しており，それを自由であると受けとめていた。

3．年齢分住型居住環境の利点と不利点（長期介護付き退職者コミュニティにおける成果と評価）

既に述べたように今日，アメリカの高齢者は基本的に二つの種類の居住形態をとっている。前述のように若い人間と高齢者が一つの家または地区で住む年齢混住型（integrated）と高齢者だけが一つの家又は地区で一緒に住む年齢分住型（segretated）という居住形態である。かつて，最も一般的であった居住環境である age–integration は，小規模の衰退しつつあるエスニックコミュニティや農村で見られるところである。その84％は子供が一時間以内のところに住んであるが，しかし子供と同居している者は殆どおらず，重要なのは彼らが子供とは住みたがらないというところである。娯楽を求める傾向，年齢による相違か，家族の絆の弱体化などで彼らは age–integration を好まなくなってきているのだ。少し古いが，ローソウ（1967）によれば，高齢者は社会に関する基本的な見方で共通するところが多い。その共通点は，皆，社会的役割を失っているとか，同じような集団に帰属していたということによって養われたものである。このために高齢者は高齢者中心的であることでしか参加出来ず，現在の若者を含む環境から孤立してしまうかも知れない。クリープランドの住民を対象とした研究で，同じくローソウは，高齢者の近くに住む友人の数は近隣の高齢者人口率によって様々であるし，彼らは同じ地域に住む高齢者と友人になるといった。さらに，友情は社会的地位，性別，婚姻状態，考え方，ライフスタイルのよく似た者同志の間で結ばれるとしている。ホティスチャイルド（1973）は，高齢者たちがますます他の年齢層と統合されるほど，その地域の中では年齢別に分けられていくだろうと結論づけた。

年齢混住型環境（age–integration）に対立するもう一つの形態として私がこれから述べようとする年齢分住型環境（age–segregation）のがある。

年齢分住型環境は多くの郊外や，公共的住宅，それから温暖なフロリダやアリゾナ，カリフォルニアに見られる引退場所，そして計画された引退者用の施設などに見られる。

上述の学者たちの研究は，それらは基本的には，退職者コミュニティが社会的に批判されているほど実際に悪いものなのかどうかを調べようとするものであった。ところで，このような分住型居住形態は，1950年代頃から，その研究の多くが行なわれるようになり，入居者達の活動や気持ちに焦点を当てたものも幾つか現われた。

「*Retirement Communities: An American Original*」という報告の中で，入居者の88％が，まだ働いている人間が住んでいる場所よりみんなが引退した所で住む方が良いと答えていると述べられている。その理由は，次のようなものである。他の人と付き合える。病気の時などお互いに助け合える。子供のいない静かな環境にいたいなどであり，カリフォルニアにあるレイズリワールドの住人の４分の３も同じ回答をし，87％は，もう引っ越しする気はないとさえ答えている。

メジャー（1967）によると，年齢分住地からのサンプルの66％が，年齢混住地に住む人間の43％よりも，より活発に他の人々と関わりを持っているという。また，ある調査では，同年代の仲間が集中した所の高齢者の方が多くの友人を作ることが出来ると結論づけている。また，年齢混住型環境においては，世代別のかかわりは最小であった。この調査はカリフォルニアの六つの退職者コミュニティで行なわれ，その結果，いろいろなレクリエーション施設等が退職した男性や子育てを終えた女性達に娯楽の機会を与えているということが分かっている。

バルテナとウッド（1969）の調査でも，年齢混住型（(age−integrated)と年齢分住型（age−segregated）社会の高齢者の対応を比べた場合，同じような社会的背景を持った者が集まった所の方が早く新しい友人を作ることが出来るという結果が出ている。さらに年齢分住型（age−segregated）を支持する理由として，引退者が集まって住む所では，引退生活に対して

順応しやすいとも言われている。第一に，余暇に対して同じような好みを持った人々がいること，つまり彼らは，強い職業意識をまだ持ち続けている友人や近所の人々と違い，余暇を正当な事として受けとめている。第二に，年齢分住型環境では，年齢混住型環境においてはあまり人気のないプログラムでもいろいろなものが作られる。第三に，同質的（homogeneous）なグループの方が長く続く友情を育てやすいのである。

退職者コミュニティの住人で，自分の家に住まないでコミュニティを選んだことに懸念をいだいていたのは３％のみであった。この３％の人々は，現在の居住地の生活を捨てて，もっと涼しい場所か，もっと経済的負担の軽い場所で住みたいと望んでいた。年齢分住型環境にいる高齢者は，そこでのみしか得られない機会に恵まれる。身体的にも社会的にも活動していられるし，孤立や孤独感なども避けることができる。ホティスチャイルドは，部外者が年齢分住型環境に不安を抱くのは，余暇のみに時間を費やし，若者と老人を引き離しているからであるという。しかし，彼女はこの種のコミュニティは人々を活動的で忙しくするためにわざわざ存在しているわけではなく，外からでは分からないが，入居者達がコミュニティの内でそれぞれのパワーと役割をしっかりと持っているのだという。さらに，住人たちは若者と一緒には居ないが，別に孤立している訳ではなく，多くの者は新しい友人を見つけているという。

反対意見としては，コミュニティに移りたくても経済的に無理であったり，家族や友人から阻害されたから来るという人々がいるということである。また，他の批判としては，退職者コミュニティは退屈し幻滅した人々が住む不自然な環境であるとの意見もある。

シャーマンエトアルは，高齢者は若い人間との接触や刺激が必要だという。また，プレッシャーが強すぎたり，プライバシーが少ない等が退職者コミュニティの住民の心配事であるともいう。

高齢者人権保護団体（グレイパンサー）の創始者であるマギーカーンも年齢分住型コミュニティに対して次のような批判を投掛けている。「極端

なことを言わせてもらえば，これらコミュニティはベビーサークルのようなものである。安全で心地よいだけで，住民はすみっこに追いやられている」。グレイパンサーサンネットワークのアリゾナバレーのナオミ　ハワードは次のように付け加えた。「退職者コミュニティはひどいところだと思う。高齢者は現実から隔離されるし，また多くの住民たちは外部の出来事に関心がなくなり，外部の人々は中でどんなことがおこっているのか知らない。我々のモットーは老いも若きも一緒に活動をしようということであり，お互い知合うために一般社会の一部にならなくてはいけない」。

しかし，バルテナとウッドは退職者コミュニティに対する批判は，年齢分住型環境の概念そのものに関するものではなく，その分住住宅の販売業者の不正や計画性のない施設についてであるという。

次に，退職者コミュニティのひとつのタイプとして介護コミュニティまたはLCRCがある。LCRCは医療が保障されているところが他の退職者ハウスと違うところである。

U. S 上院老齢化特別委員会の公聴会によると，終身介護コミュニティの支持者は，ここの入居者は病院入院率も低く，他と比べて寿命も長いと主張する。終身介護は孤独，退屈，社会的又は物理的な孤立にも陥らないし，経済的に自立した人間には政府援助に頼る必要もない。さらに，自立を保てることが保証され，必要な場合には個人介護，在宅介護，老人ケアなどが前払い式で提供される。退職者コミュニティにはすばらしい利点があるとアメリカ退職者連盟（American Association of Retired Persons: AARP）のレオホールドウイン氏は言っている。自由が与えられ，家事からは開放され，余暇だけでなくその利用方法まで教えてくれる。これらの場所では士気（生活意欲）が非常に高い。よく計画，運営された施設に住むほとんどの住人はもっと早く来れば良かったと思うであろう。ただ一つの不満といえば，ここに移るのに待ち時間が長すぎたということである。

シャーマン（1971）は，終身介護施設を含む様々な退職者コミュニティの住人と面接を行なった。それによると終身介護施設の住人は次の理由で

やってきたという。自立心とだれかの重荷にならないで済むことと，医療設備と食事そして安心感等々である。さらにシャーマンは10の人口統計的条件は同じで，一つだけ条件の違うグループを抽出して比較した。その条件とは退職者コミュニティに住んでいないということである。年齢分住型環境の利点としてそのグループは，①同世代の人に会えて仲間ができる，②医療施設や個人的なニーズなどを見てくれる，③家事や庭の手入れから開放される，④時間を楽しく過ごせる方法を教えてくれるなどを挙げている。不利点としては，①老人だらけ，②退屈，③死亡が多すぎる，④プライバシーが十分でない，⑤拘束が多すぎる，⑥費用が高すぎるなどが挙げられている。

ついでながら，ストレイブらは，CCRC についてのそれまでの研究を批判して，次のように興味深いことを言っている。「CCRC の開発業者がして社会科学者がしていないことは，高齢者を消費者としてパワーと好みを正確に判断し，それに充分答えたと言うことだ」。以上はいずれにしても，今後に残った論争点である。

Ⅲ．CCRC 入居者の QOL

それでは次に，CCRC に入居している人が満足しているかどうかという一番重要なポイントについて述べてみたい。これについて，考えるには，次の要因に注目すべきである。(1)健康の自己評価（Perceived Health），(2)実際の時間の使い方と希望する時間の使い方（活動，睡眠，有償の仕事，ボランティア，自分の身の廻りの世話，家族の世話，組織活動，社交，レクリエーション，その他の娯楽等），(3)経済的満足度（Financial Satisfaction），(4)社会的活動（Social Activity），(5)その他の要因がある。

実際これをめぐって，どの程度の健康の自己評価があるか，実際の時間の使い方と希望する時間の使い方にどれほどのギャップがあるか，経済的満足度はどうなのか，社会的活動の影響はどうなのか等々，年齢混住型の

人々と比較してこそ分かるわけである。ところがそういった調査が遺憾ながら無いのである。ただ，CCRCの内部に限っての意識調査をしたものがある。そこで，それを簡潔に紹介すると以下の通りである。

○研究対象及び方法測定

それはCCRCの入居者の無差別抽出サンプル400名を対象に，Cantril's Sell−anchoring ScaleとLife Satisfaction Index−Z（LSI−Z）の調査表がセットに同封して，研究目的，秘密厳守を説明し全質問に回答して速やかに返事をお願いする故の手紙を添えたものであった。

○回答者（サンプル）の基本的属性

・入居者の年齢は，63〜95歳であり，平均年齢79.5歳であった。
・男女比は，男23.7％：女76.3％と女性が圧倒的に多かった。
・婚姻状況は，住人の半数以上の52.6％が死別，29.6％が既婚，そして，13.5％は結婚経験が無かった。
・以前の職業は，約半数の43.4％が専門職で，その中の半数が教育職であった。事務系と販売職は28.1％，専業主婦が16.1％であった。
・平均学歴年数は，13.765年で，これは大学教育を含んでいる。
・入居期間は，2カ月〜13年8カ月で，平均は4年10カ月であった。

○健康の自己評価

4分の3以上の78.1％が，“健康”又は“非常に健康”と報告している。1980年に発表された退職者ホームに入っていない老人の全国調査によれば，68％が“健康”又は“非常に健康”，22％が普通，9％が悪いと報告されているが，それと比較すると，CCRCの入居者は，よりポジティブに健康への自己評価を下している。なお健康状態が良くないと答えた入居者の半数の生活満足度は低くなっているが，非常に健康だと答えた93.6％は高い，総合生活満足度を示している。

○経済的満足度

回答者の5分の4以上の80.7％が，現在の経済状態に“いくらか”又は“非常に満足”していると答えている。また，自己の経済状態に“非常に

満足”している住人からは高い総合生活満足度がみられる。即ち，経済的満足度は生活満足度に大いに関係しているといえる。

○時間の使い方

その内容については以下の通りである。

回答者の４分の３以上79.2％が，“いくらか”又は“非常に満足”していると答えた。有償の仕事，ボランティア活動，身の回りの世話（入浴，着脱衣，食事の用意，食堂での食事，医師や看護婦の訪問），同居家族の世話（家事，買物，人の世話）※夫婦で入居している者もいる，宗教活動（一人で祈る，礼拝にでる），マスメディア（読書，雑誌，テレビ，ラジオ），社交（訪問，家でもてなす，電話で話す，パーティに行く），レクリエーション（運動，スポーツ，散歩），その他余暇（趣味，芸術，クラフト，手紙を書く，木を使った工作）旅行，リラックス）等の10種類の活動群についての実際の時間の使い方と，希望する時間の使い方も調査されている。その結果によれば，今のままで良いと答えた割合は，51.8～85.4％であった。希望する時間の変化量は，極めてわずかであったが，変化を希望するカテゴリーは，有償の仕事，レクリエーション，その他余暇，ボランティア活動，宗教活動等々であった。そして10種類すべての活動の実際と希望する時間の使い方の絶対差を合計し，Total sum difference score の計算によれば，回答者の57.3％は今のままで満足していると答えている。さらに，CCRC の入居者の10種類の活動群について時間の使い方についての食違いと生活満足度との関係を決定するために回帰分析が行なわれた。結果として，統計的に有意な変数は，社交についての時間の食違いだけであった。つまり，社交に実際に費やした時間と，希望する時間が一致すればするほど，生活満足度が高くなることがわかった。次に，人口統計学的変数（年齢，性別，婚姻状態，以前の職業，学歴，入居期間）と生活満足度との間に関連があるのか否かを決定する為の回帰分析の結果について述べるならば，年齢，学歴，入居期間，健康自己評価，経済満足度といった要因が，その総合的生活満足度の相違の25％に影響を与えていた。この５つの変数

を更に分析すると，自己健康評価と経済的満足度が最も強力な決定因子であることが判明した。

以上を要約するために，健康自己評価，経済的満足度，付き合いにかける実際と希望する時間との間の一致度と学歴が，どのような影響を生活満足度に与えているかを以下に図形で示してみよう。

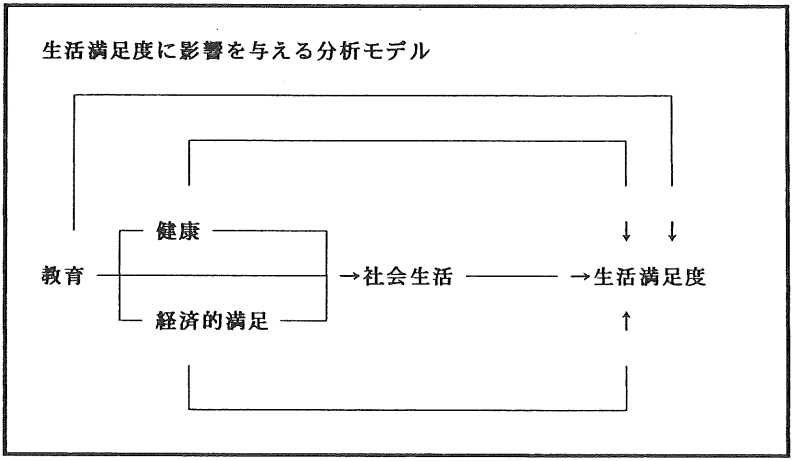


図1

この調査結果は，年齢区別型コミュニティの利点を表している。それによれば，CCRC の生活の質は高いといえるようである。全体的に，彼らの健康自己評価と経済的満足度が高ければ，一般的社会においても生活満足度は高いはずであるが，その人々がこの種の年齢区別型環境に移り住んだ後においては，より活動的な生活を送ることが出来るようである。制限がなく医療サービスがあり，多くのレクリエーション活動，同年代の良く似た背景を持った仲間等々，これらすべてが生活満足度の高い事の理由となっている。時間の使い方も非常に多様であり，入居者の生活満足度は維持される訳である。この結果は，活動説でも離脱説でもなく，継続説を支持するものである。この説によると，環境さえ与えられれば年老いても尚，

以前と変わりなく活動を続けられるという。

僅か1カ月という短い期間ではあったが，私の居住したCCRCにおいても，この結果と同様，否，それ以上に入居者たちは若い人と同じか，それ以上に生活を楽しんでいた。CCRCにおいては，あらゆる制限が少ないので，入居者たちは各々がそれぞれの状況に応じて活動のレベルを増やしたり減らしたり，維持したりする事が出来るのである。

Ⅳ．おわりに

人口統計学的変数を見ると，CCRCの入居者は中～上流階級に属し，かっては専門職を持ったことがあり，生活はかなり満足している幾らかのホモジーニアス（homogeneous）な人々の集団である。

この調査の中で指標として挙げられている経済や健康は，恵まれていれば恵まれていない人々に比して，満足度が高くなるのは当然の結果といえよう。従ってこの事態は，厳密にいえばCCRCが優れたものであるのを証明するものではない。

わずかにここでCCRCの優秀性（利点）について証明されているのは，時間の使い方が年齢混住型居住形態に住む高齢者よりも遙かに自由であることである。確かに，ここの住人は時間制限がなく，家庭に居るよりは自由が大きいであろう。つまり，一般高齢者と比べて制限が少ない生活を送っているので自分の望む時間の使い方が出来るのかも知れない。また，CCRCに入る人が増えつつあるということも，CCRCが快適であることを示す証拠でもあろうけれども，しかしながら，その背景には，高齢化が進み，経済が豊かになったということが影響していると思われる。

そこで注目したいのは，次の点である。現在ヨーロッパ諸国においては，施設介護よりも在宅介護を進めている。これと，アメリカのこのCCRC増加の傾向は，正にコントラスティングである。この点の分析，解明こそが，私の求めているところであるが，目下，資料を入手手配中である。こ

れまでの高齢者研究の多くは，弱者と貧困者についてであった。しかし，65歳以上人口が増加し，またその高齢者の中でも後期高齢者の割合が急速に進行する。これに対処するために，年齢分住型コミュニティについても更に研究する必要があろう。近い将来に，この研究結果を報告し得ることを願っている。上に述べたアメリカのCCRCは，富裕なアメリカの中・上層階級に特有なものであり，現在，景気が低迷しており，今後も経済的困難が増大することが予想される日本において，アメリカのCCRCを，そのまま模倣することは難かしいであろう。しかしながら，このような日本の経済と財政的事情を考えるならば，公にばかり頼ることには限界があるから，自主自立型の高齢者居住であるCCRCに学ばなくてはならない点が少なくない。

実際，国家が老人医療・老人介護を広汎に引き受けている西欧諸国は，今日，国家財政の窮迫に苦しみ，そのために経済成長に支障をきたしている。それに対比して，アメリカのCCRCのようなものが拡がれば，国家財政の膨張にブレーキを掛けることになるであろう。その意味で，CCRCもアメリカン・ウェイ・オブ・ライフの一つの長所を示すものということができよう。そういった点からも，CCRCに我が国でももっと注目をしても良さそうに思えるのである。

(付記)　本稿を執筆するに当たっては，テンプル大学のDr. Elaine. R. Greenの「The Relationship of Use of Time, Perceived Health, Financial Satisfaction to Life Sayisfaction Of Continuing Care Retirement Community Residents」論文と，フロリダ大学のDr. William. E. Foltsの「The Structural and Environmental Dimensions of Florid's Continuing Care Retirement Communities」論文に教えられる所が極めて大きかった。ここに記してお礼申し上げる。

また，留学先のアメリカにおいて，UCLAのDr. Harry. S. Kitano, D. S. W. James Lubben, フォーダム大学のDr. Marry. A. Quaranta, M. S.

Martha Bial，ハーバード大学の Dr. Frank. J. Schwartz 等々多くの専門家，CCRC Westwood Horizons の A. D. John Peters をはじめとする教授・職員及び入居者の皆様にも大変な便宜を計って頂いた。その他お世話になった関係者各氏に，そのご懇情を今噛み締めて，深謝している次第である。

最後に，アメリカ留学に関しては，同朋大学の皆様のご厚情を頂いた。皆様のご好意でこの研究が許されたことを記して感謝の意を表したい。

注

1）私が訪問したスウェーデンで見た老人ホームでは，家族を迎え入れて，彼らに茶菓子を提供する施設もあり，たえず家族の訪れがあった。

2）ここで，昨年度の渡米中に，部分的ではあるが，私が体験入居してきた CCRC について衣食住を簡単に説明しておこう。部屋はすべて個室であって，キッチン，トイレ，バス，冷蔵庫等は付いているが，食事にはほとんど，ゴージャスな食堂が使われていた。皆，外出，レク等の活動に忙しく，キッチンはまるで使用されていない。家事からの開放を心から楽しんでいるのだった。部屋の家具調度は，永年使用してきたものを持ち込んでも良いし，持ち込まなくても自由である。つまり，備え付けの家具で生活するのは何の不自由もないのである。衣料はすべて自前であり，月一回，施設と契約しているブティックが，ドレス，セーター，アクセサリーを販売する日があり，大変な人気であった。洗濯は，各階にランドリーがあり，各自が，自分の洗剤とチップ（前以て施設から購入している）を持って，各々行なうようになっている。要介護入居者は，自分で雇ったフィリピーナのコンパニオンが行なっていた。

ちなみに，私の入居していた部屋は一泊85$（日本円にして約8500円），間取り図2の◎Suite である。建物の中に，美容室もホールもあり，ショッピングや銀行，郵便局への用件はフロントにいるクラークが行なってくれる。医療ケアについては，定期健康相談があり，病気になった時は UCLA メディカルセンターへ行くことになっていた。

3）特筆すべきことに，CCRC の中に占めるアクティビティ・ディレクターの活躍がある。日本と違い，土地が安いために施設が多すぎて，この市場は非常に競争的である。そこでは，魅力あるアクティビティを提供出来るか否かが入居者の満足につながり，それがそのまま入居率にはねかえるほどの大きな影響力を持つ。本節の最後に，ここウエストウッズ・ホライゾンズにおける入居高齢者へのアクティビティ・サービス（表）を示しておこう。

次にアクティビティ・ディレクターについて付言するならば，その呼称は州によ

り異なるが，それは高齢者施設等において，入居者への運動や軽いスポーツ，ゲームを中心としたパーティ，ショッピング，ナイトショー等のアクティビティ・サービスのディレクターもしくはコーディネーターその人のことである。具体的職務内容は以下の通り。

(1)施設利用者一人ひとりの興味や能力，意欲，体力等からアクティビティ全体の計画立案。

(2)各アクティビティへの入居者の参加状況や反応，問題点を各アクティビティの指導者の記録を基にアセスメント。

(3)年間計画，月間計画，予算の財務管理，運営。

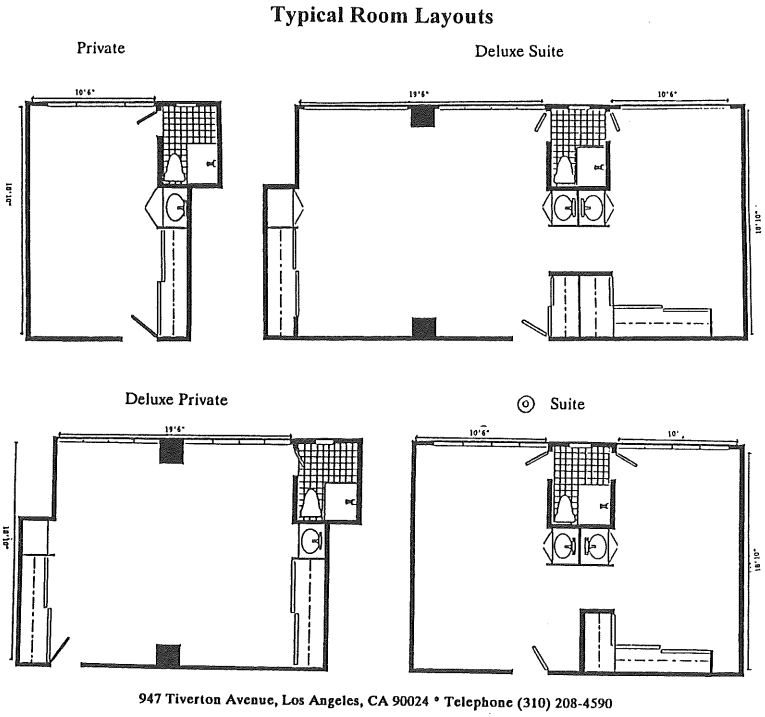


図2

表2　ウエストウッズ・ホライゾンズにおける入居者へのアクティビティ・サービス

	日	月	火	水	木	金	土
August, 1995 イベント予定表	9:00 宗教セレモニーサービス 10:00 グループダンス 14:00 ビンゴゲーム 15:00 ハッピーアワー 15:30 文字合わせゲーム 19:15 映画会	9:00 専用バスで検診 10:00 エキササイズ 10:45 アートとクラフト 11:00 クラブ活動 14:30 ライブミュージックショー 16:00 ポーカー 19:15 最近の出来事	9:00 皮膚科医の診察 9:00 専用バスで検診 10:00 エクササイズ 14:00 ビンゴゲーム 15:30 講演：デカルロ医師「発展的健康度について」 19:15 ドロシー・ギルデンショー	10:00 ウォーキングクラブ 10:00 エキササイズ 12:00 宝石と装飾の販売 12:00 パティオでパーティ 13:00 日用品買物 16:00 ポーカー 19:15 男性のみのポーカー 19:15 映画鑑賞	9:00 専用バスで検診 10:00 エキササイズ 10:45 クリエイティブ・アーツ 14:00 ビンゴゲーム 15:00 歌いましょう 15:30 グループ活動 17:15 キャンドル・ライト・ディナー 19:15 カードゲーム 19:15 映画鑑賞	9:30 ダンスクラブ 10:00 防災訓練 11:00 エキササイズ 12:00 宝石販売 13:00 ウエストサイド・バビリオンへ買物 14:00 音楽 14:30 スナック・バー 15:00 ブラックジャック 19:15 フライデーナイト・ライブ・ショー	9:00 整形科医の診察 10:00 ユダヤ人の島のイベント 11:00 絵画教室 14:00 ビンゴゲーム 15:15 創作活動 15:00 おたのしみ 19:15 ユダヤ人の集い

(4)ボランティアの組織化，管理，研修，交流の場の開拓，指導。
(5)周辺地域社会との交流。
(6)各セクションの実践指導者へのスーパービジョン。
(7)連邦政府，州政府情報の収集と活用。
(8)地域資源の効果的な活用等の検討。
(9)利用者委員会の機能の評価。

このアクティビティ・ディレクターの条件は州により異なり，千葉和夫によれば，南イリノイ州は認定された大学でセラピーティック・レクリエーションのコースを履修し，16週間にわたる実習を終了した上で，更に2週間の経験を積み，レクリエーション・セラピストの資格を取得しなければならないとされている。他方，私の住んでいたカリフォルニア州では，一般の大学を卒業した上で，大学院のセラピーティック・レクリエーションのコースを履修しながら経験を積んでいる人が，アクティビティ・ディレクターとして各施設に採用されていた。各州のアクティビティ・ディレクターの条件を平準化すると以下の三つを挙げることができる。

(1)過去5年にレクリエーションプログラムの体験が2年間以上あり，その半分は，常勤スタッフとして，入居者の健康増進の為のプログラム作りに従事していること。
(2)その職務は，作業療法士，音楽療法士，ダンスセラピスト，アートセラピスト，レクリエーションセラピストもしくはアシスタント・ディレクターであること。
(3)この職務を遂行するために考案されたトレーニング課程（36単位）を完全に履修しており，その上で，作業療法士，アシスタント作業療法士，レクリエーションセラピストの定期的かつ個別の指導を受けていること。

4）Continuing Care とは，法的義務のある無しに拘らず，生涯にわたるケアを，ある程度，期待させるコミュニティを含むより包括的用語である。他方，ライフケアは，実現可能不可能に拘らず，入居者を生涯にわたってケアする法律的保障があるコミュニティに限定される。

参考文献

(1) Elaine. R. Green The Relationship of Use of Time, Perceived Health, Financial Satisfaction to Life Satisfaction Of Continuing Care Retirement Community Residents, 1990.
(2) William. E. Folts The Structural and Environmental Dimensions of Florid's Continuing Care Retirement Communities, 1991.
(3) Hunt, M. E., Feldt, A. G., Marans, R. W., Pastalan, L. A., & Vakalo, K. L. *Retire-*

ment communities: An american original. New York: The Haworth Press, 1984.

(4) Morrison, I. A., Bennett, R., Frisch, S., & Gurland, B. J. (Eds.) *Continuing care retirement communities: Poritical, social, and financial issues.* New York: The Haworth Press, 1986.